

薬剤散布となし幸水の果面の汚れとの関係

1. 試験のねらい

なし幸水では収穫果実の果面の汚れが問題になっているので、薬剤散布の時期、混用薬剤の種類及び展着剤加用の影響について平成2～3年に検討した。

2. 試験方法

幸水を供試し、枝別に殺菌剤殺虫剤の混用散布区及びそれに展着剤を加用する区を設け、6月中、下旬と7月中、下旬にそれぞれ10日間隔で2回ずつ（平成2年は7月中～8月上旬に3回）散布した。供試薬剤は下表のとおりで、果実を中心に十分に散布した。なお、ルビゲンは平成2年、キャブレート及びトクチオンは平成3年のみ使用した。

殺 菌 剤		殺 虫 剤		展 着 剤	
キノンドー水和剤（40）	800倍	スミチオン水和剤	1,000倍	アブローチBI	1,200倍
オキシラン水和剤	800倍	サリチオン水和剤	1,000倍		
サニパー水和剤	600倍	トクチオン水和剤	800倍		
キャブレート水和剤	600倍				
ルビゲン水和剤	3,000倍				

平成2年は収穫期に一齐収穫して、平成3年は収穫直前に結実したまま、1区30～40果について、コルクの発達及び汚れの発生を調査した。

3. 試験結果および考察

平成2年の結果は表-1のとおりで、コルク発達が良かったのは殺菌剤のサニパーで、これは汚れも少なかった。殺虫剤のスミチオンを混用すると汚れがひどくなる傾向が見られ、スミチオン散布のときに展着剤アブローチBIを加用するとコルクの発達が良くなり、汚れも軽減されたが、葉裏に薬害を生じた。

平成3年の結果は表-2のとおりで、6月の殺菌剤と殺虫剤の混用散布は、薬剤の種類にかかわらず、7月の同じ組み合わせの散布に比べて果面のコルクの発達が劣った。果面の汚れは、6月の散布より7月の散布で多発し、特に殺虫剤のスミチオンを混用した場合に汚れが多かった。また、殺菌剤のキャブレートとサニパーは汚れが少ない傾向であった。

6月の散布の時に展着剤のアブローチBIを加用すると、コルクの発達が良くなった。7月の散布に加用してもコルクの発達には影響なかったが、スミチオンを使用した区では果面の汚れが軽減された。しかし、いずれの時期でも葉裏に軽い薬害がみられた。

4. 成果の要約

6月の薬剤散布は果面のコルクの発達に、7月の散布は果面の汚れに対する影響が大きく、展着剤の加用により、6月の散布では果面のコルクの発達が良くなり、7月の散布では汚れが軽減された。また、サニパー及びキャブレートは汚れが少なく、7月のスミチオンの混用は特に汚れやすかった。

（担当者 果樹部 金子友昭）

表-1 薬剤散布による果実の汚れの発生状況（平成2年）

供 試 薬 剤	コルク	汚れの
	の発達	程 度
殺虫剤+キノンドー	1.63	1.39
〃 オキシラン	1.38	1.57
〃 サニバー	1.81	0.74
〃 ルビゲン	1.23	1.62
殺菌剤+サリチオン	1.68	1.01
〃 スミチオン	1.38	1.55
殺菌剤+スミチオン+アブローチBI	1.49	1.11

注. コルクの発達 0（不良）～3（良）

汚れの程度 0（無）～3（多）

表-2 薬剤散布による果実の汚れの発生状況（平成3年）

供 試 薬 剤	6月の散布		7月の散布	
	コルク の発達	汚れの 程 度	コルク の発達	汚れの 程 度
殺虫剤+キノンドー	1.85	0.98	2.32	1.17
〃 オキシラン	2.04	1.11	2.19	1.04
〃 サニバー	1.82	0.98	2.05	0.88
〃 キャブレート	1.99	0.85	2.29	0.87
殺菌剤+サリチオン	2.05	1.03	2.27	0.85
〃 スミチオン	1.72	0.99	2.19	1.26
〃 トクチオン	2.01	0.94	2.18	0.86
殺菌剤+サリチオン+アブローチBI	2.48	0.93	2.13	0.90
〃 スミチオン+アブローチBI	2.20	0.86	2.16	0.92

注. コルクの発達 0（不良）～3（良）

汚れの程度 0（無）～3（多）